

明日香をさぐる

藤原道長、飛鳥を行く

治安3年（1023年）10月、昨今話題の藤原道長が飛鳥を訪れました。その道中を紹介します。

この世をば わが世とぞ思ふ
望月の 欠けたることを 無しと
思へば

太政大臣にして揺るぎない地位を築いた道長が詠んだ有名な和歌です。時に道長53歳。まさに栄華の象徴ともいべき一句です。

この歌を詠んだ翌年、道長は職を辞して出家します。道長自身が病になったためです。その後、道長は法成寺の造営に心血を注いでいきます。道長は仏教に深く帰依して、死後に極楽浄土での往生を願っていました。

治安2年（1022年）、いよいよ法成寺が完成し、道長はこの後、

法成寺で余生を送ったようです。

翌治安3年、道長は高野山への参詣を思い立ち、10月17日、金剛峯寺を目指して出発しました。

この参詣旅については、『扶桑略記』に詳しく書かれています。この参詣旅は、閑白である長男の頼通を都に残して、道長とほかの息子たちをはじめとする総勢17人で行った。この一行が参詣を終えて京に戻ってくるのが11月1日です。15日ほどの長旅です。

旅の初日である17日には奈良の東大寺で宿泊し、翌18日には東大寺の大仏のほか、興福寺、元興寺、大安寺、法蓮寺と参拝した後、夜

によりやく山田寺に到着しました。翌19日、山田寺、飛鳥寺を見てまわり、夕方には橘寺を出て、竜門寺に宿泊しました。

それでは飛鳥の地を巡った19日の行程を詳しくみてみましょう。

山田寺では堂塔を見た後、「堂中奇偉を以て莊嚴す。言語云に黙し、心眼及ばず。」と述べ、言葉にできないほど感嘆している様子がわかります。

山田寺の参拝の後は飛鳥寺に向かいます。飛鳥寺では、「宝倉を開きて覽しむ。中に此和子陰毛有り。鐘堂の鬼頭忽ち撰び出だし難し。物多く事忙に依れば也。」とあります。飛鳥寺の宝蔵を開けてもらいましたが、宝蔵の中は物であふれて雑然としていました。そのような状態のなかで此和子陰毛を見ました。しかし、鐘堂の鬼頭は見られませんでした。

さて、これらの珍宝は現存していませんので、いまは全く見当がつきません。一体この珍宝は何なのか、その答えと思われるものが『日本靈異記』に記されています。

『日本靈異記』には、雷の化身を助けたところ、その子どもに怪力な子が生まれ、その子が出家して

元興寺（飛鳥寺のこと）の道場法師となる説話があります。道場法師が童子だったころ、その怪力で元興寺に住みつくと鬼の頭髪を掴まえたが、鬼は髪の毛を引き剥がされながら逃げていきました。道長が見たかったのはきっとこの元興寺の鬼の毛だったのでしょう。



飛鳥寺を発つた後、橘寺に到着します。橘寺でも「宝物を披覽」しますが、なかでも「天雨曼荼羅花」が見たかったようです。しかし、次の寺までの道が遠いため、宝物を見る時間が少なく、結局見ることができませんでした。

道長ご一行による飛鳥の旅路は不満が残る旅路だったようです。しかし、10月22日、道長ご一行は念願かなって金剛峯寺へ無事参詣をとげました。

（明日香村教育委員会文化財課）